

マスメディアのなかの女性

鈴木和枝

マスメディアに現れる女性像に関心をもって内外の記事を読んでいる。1988年1月に、日本の英文メディアで働くライター・編集者・翻訳者の会SWEETが主催するシンポジウムがあり、パネリストの一人として、日本の新聞の性差別表現について話したことで、ますます気になってきた。

その後、少しは変化しているのだろうか。

遅々とはあるが、その兆しはあると思う。最近気づいた変化をランダムに述べてみる。そして、性差別を助長する表現を減らすにはどうしたらいいか、考えてみたい。

バルセロナ・オリンピックのアイドル、田村亮子さんのニックネームは「YAWARAちゃん」。女性が柔道をするのが、特別であるかのように女が強調された「女三四郎」の時代が、遠い昔に感じられる。

「セクハラ」ということばも普通に使われるようになった。性的嫌がらせは以前からあったが、女性たちの運動のおかげで、市民権を得たことばといえるだろう。メディアも社会現象として無視出来なくなった。朝日新聞のデータベースで「セクハラ」をキーワードに検索してみたら、1989年には10件に過ぎなかった文書件数が92年12月12日現在90件と出た。

最近の記事では、次に打ち上げられるスペース・シャトル「コロンビア」の宇宙飛行士に決まった向井千秋さんのことばが爽やかだった。「わたしが宇宙に行くことで、女性だからということで一つ殻を破れないでいる人に力を与えられたら」とインタビューに答えて。

今の小学生の男女から、等しく、将来は宇宙飛行士になりたい、などと聞かれるとしたらうれしい。

朝日新聞の「取り決め集」は1988年の改訂版から、用語・表現の項目のなかに、性差別についての規定が追加された。遅すぎたとは思いますが、入るべきものが入ってよかった。「取り決め集」は「用語の手引き」とならんで記者

の必携すべきものである。

差別のページを開くと、「人種、民族、身分、地位、地域、職業（職種）、性別、病気、障害などについて、差別の観念をもつのは、人権を侵害するので厳に慎むべきである」と書いてある。

言い換えの例を引用してみる。「未亡人」は「故〇〇氏の妻」に。「女流作家」「女流画家」は使わない。「女傑」「女丈夫」も使わない。「じゃばゆきさん」は、「アジア人入国者」に。「主人」「亭主」は「夫」になるべく言い換える、となっている。

先のシンポジウムで「日本の新聞社で、記者用の言い換え集はあるのか」と聞かれ、ないと答えた。会場の他社の記者もないといていた。在日の外国人編集者や記者は信じられないという顔をしていた。パネリストのひとり、編集者のスザンヌ・トランブルさんはこう言った。「部落差別や、身障者差別に関しては敏感なのだから、できないはずはない。」

たしかに、「じゃばゆきさん」や、「老女」などの表現は減ってきた。「老人」の代りに年齢を書くのが、一般的になってきたようだ。年齢を書くことの意味については疑問もあるが、多くの人が不快に思う「老人」という表現を避けるようになったことは事実だ。

メディアの送り手の側に女性が少ない、とよく指摘される。ここ数年、ささやかではあるが女性記者が増えている。1989年、新聞協会加盟社の女性記者は2パーセントに過ぎなかったが、91年には4%を越えた。朝日新聞では、現在8パーセントだ。

1991年、民間放送で、女性アナウンサーは13.1パーセント、報道に占める女子は406人、1.5パーセントに過ぎない（日本民間放送連盟調べ）。

「社会に女性が全面的に関与していることを認識する」（カナダ放送協会の指針より）ためにも、「女性自身が自分の能力や可能性を過小に評価してしまわないために」（ロンドンのメディア女性グループ）も、女性記者はもっと増えるべきだと思う。

各紙に外部の有識者が受け持つ紙面評価の欄がある。女性の筆者からは、女性差別についての鋭い指摘がみられる。

上智大学教授の猪口邦子さんは、10月31日の朝日新聞で、日本人高校生が射殺された事件報道に触れ、「会社員服部政一さんの長男・剛丈（よしひろ）君」という書き方はおかしいと、指摘する。「子供は両親共に力を合わせて育てるのに、なぜ、父親の名前だけなのだろうか」と問う。

猪口さんはまた、「なんでもQ&A」で政治経済がテーマになると、聞く側が女性、答えるのが男性という場合が多いと書いている。

横浜女性フォーラム館長の有馬真喜子さんは、アメリカ大統領選挙を目前にした10月18日の東京新聞の報道について、女性議員の躍進に注目した点を評価しながらも、「“台所の声”反映へ」という見出しには、あきれていた。（「私の注文」東京新聞、10月25日）

以上、差別表現の減少、女性筆者の増加など好ましい変化をあげたが、他方、ため息をつきたくなるほど変わらないこともある。記者の考え方を反映する固定表現もその一つ。6月の始め、首相官邸SPになった鈴木知子さんが紹介された毎日や産経新聞の人物欄は、ハードな仕事への抱負を紹介しながらも、「結婚するなら心の温かい人」と、結婚にあこがれる一人の独身女性の顔になった」としっかりつけ加えていた。

ノーベル平和賞を贈られることに決まった。リゴベルタ・メンチュさんについて、10月17日の読売新聞は、「中米グアテマラの先住民擁護の女性活動家」と女性を強調し、産経新聞と日経新聞は、「メンチュ女史」と呼んでいた。毎日新聞と朝日新聞は「メンチュさん」と表現している。

日本人女性に「女史」を使う例は、最近はほとんど見ないが、海外の女性にはよく使われている。10月24日の朝日新聞記事（共同電）で、米国のジェラルディン・フェラーロ元下院議員と、ミャンマーの民主化指導者、アウン・サン・スーチーさんが女史と呼ばれている。

1990年、女子高校生のコンクリート詰め殺人事件が起きたが、被害者が悪いかのような報道に対し、女性読者は悲憤をおぼえ、男性の多くはそうではなかったという。（おんな通信社編『報道のなかの女の人権、“女子高校生コンクリート詰め事件”をめぐる』社会評論社）男性の（多分）書き手と、男性の読者とは、同じように受け止めていたのだ。

性的偏見や人権への無配慮は、書き手の意識の問題だ。書くときに、たえず自分でこの表現でよいのか、考えなければならない。

最近では世の中の動きより、マスコミの感覚の方が遅れているといわれる。女性グループの運動や読者からの批判が、マスコミに現れる性差別表現を減らすことにつながっている。

夏のセミナーでこう話したら、「そんなこといわずに、マスコミはやはり一歩先を歩いてほしい」と言われてしまった。

参考：アメリカでの性平等表現の試み、禁止語と言い換え例

(左が実例、右が言い換え例)

- 人間を代表してmanが使われている

man's achievement	human achievement
mankind	human kind
manpower	human resources, work force, staff
sportsmanship	sportship

- 職業を表すのにmanが使われている

airline steward, ess	flight attendant
anchorman	news anchor, anchor
businessman	businessperson
policeman	police officer

- 女を強調する職業

lady doctor	doctor
woman lawyer	lawyer
housewife	homemaker
actress	actor

- 男性をリーダーとして扱う

man and wife	husband and wife
black tie gala	semiformal

(全米女性機構によるPractical Guide to Non-Sexist Languageより)

(ジャーナリスト)